

## 自然ふしぎ

三角形の帽子が、桃山時代の桃形兜に似ている。中南米に分布するアンテミアンセというツノゼミの姿は、実に愛嬌がある(写真上)。幼虫には「覆い」はない。かわりにその背に15本の鋭いトゲが備わり、ちよつと怖そう。成虫からは想像もつかない姿である(写真下)。

ツノゼミの仲間には、胸部の上の部分



1



大きく発達、頭上からお尻の先までを覆う体形になっているの特徴だ。その形は種によって変わり、ときに人知を超えたものになる。それが、この仲間の最大の魅力でもある。これからしばらく、彼らの変化ぶりを楽しんでいただきたい。

写真・文 西田賢司 探検昆虫学者  
72年、大阪府松原市に生まれ。10年ほど前から、中米のコスタリカを舞台に昆虫の新種や新生態を発表し続けている。



## 自然ふしぎ

ようやく、ハイフィノエの仲間にもめぐりあえた。コスタリカの熱帯雲霧林に住んでいるが、これまでなかなか出会うことができなかった。

体長15<sup>mm</sup>と、ツノゼミの中でもかなり大型。何より、頭の上にそびえ立つ「巨大」で、いかつい壁に圧倒される。第一印象はトランペットを入れるケース、第二印象はスフィンクス像。なぜか、生き物の中には似たものを思いつ



2

かない。

慎重に近づき、遠めからシャッターを切り始める。うまいことにヒメハギの葉にストローを刺し、そのジュースを飲むことに専念している。それは、まぎれもなく生きていた。

表面に、意外と目立つ細かい白い毛が生えているのに気づいたのは、帰って写真を見てからだった。

(探検昆虫学者・西田賢司)

## 自然ふしぎ

あるグループのツノゼミの子育ては、少なくともその「精神」においては哺乳類や鳥類と変わらない。産卵に適した部位の確保、位置の綿密な確認、慎重な産卵……。そして産卵後も、産んだ卵を抱くようにして、じいっつとしたままだ。ツノゼミの卵に卵を産む小さな寄生バチが



いる。ハチが近づくと、母親はブーンと翅をふるい、後ろ足でキック。多彩な技で敵を近づかせない。孵化後も、幼虫を食べにくるクモやカメムシがはい上がらないよう枝の根元で見張りを続ける。

セミ同様、胸部で振動を起こし、植物の表面を伝わって、互いにコミュニケーションをとる。特殊マイクで拾うと、警戒時の声は、暴走族がエンジン吹かす音に聴こえる。(探検昆虫学者・西田賢司)



## 自然ふしぎ

頭の上にすらっと伸びたツノに。毛の生えた四つのコブ。奇妙な姿のヨツコブツノゼミ（体長5<sup>mm</sup>）は、ツノゼミの中でもとくに人気が高い。それにしても、アンテナのようなコブは一体何なのか？ 運良く、オスの求愛のシーンを見ることのできた。メスに寄り添って、自らの美しさを誇示するように、瞬時に翅を広



4

げる。メスの反応をうかがっては、この「口説き」の行動を繰り返していた。

実はこのほかに、ツノゼミには求愛の鳴き声もあって、胸部で起こした振動を植物の表皮に伝わらせて相手に気持ちを伝えていくといわれる。もしかすると奇妙なコブも、メッセージをより効果的に送受信するための、正真正銘のアンテナなのか？ それは、まだこれからの研究課題である。（西田賢司・探検昆虫学者）



## 自然ふしぎ

ツノゼミの中には、写真のメンブラキス・ドルサタ（体長10<sup>3</sup>μ）など、白黒のパターンをもつ種類がそこそこいる。いずれも薄っぺらく、背中側が滑らかなカーブを描く。乳牛でもあるまいに、この配色に何の意味があるのかと以前から不思議に思っていた。

森島啓司さんの「ものまね名人ツノゼミ」という本を見ていて、ひらめいた。もしかこれは朝露。白黒パターン



は、水滴への擬態ではないのか？

以来気をつけていると、白黒ツノゼミは一カ所に集まる傾向が強く、逆さまになったり、地面に背を向けたりしている。確かに、茎から滴る水滴に見える。「白」は水滴でいえば光を反射している所、「黒」は周囲の景色が映り込んだ所。思い込み、といわれればそれ以上反論できる段階の話ではないのだが。（探検昆虫学者・西田賢司）



## 自然ふしぎ

都市開発が進むコスタリカの首都サンホセ。大学のキャンパス内にクロトンという大木が数本生えている。植えたものではなく、たぶん大昔からここに自生していた木だ。

虫たちに人気があり、ツノゼミだけでも4種を確認している。中でも、エンケノーバの幼虫（体長5<sup>センチ</sup>）は、完全にこの植物向けに特殊化している。粉をふき、少しごわごわ感のあるクロ



トンの葉脈にそっくりなのである。

これほどまできめ細やかな擬態は初めてで、出あって胸がときめいた。葉脈に沿って「ならえ」をするように整列、体の細い方を葉脈の細いほうに向ける芸の細かさ。長い、長いクロトンとのつき合いを想像せずにはおれない。そんな営みを閉ざさぬためにも、もともとその土地に生えていた木々は大事にしたい（西田賢司・探検昆虫学者）

## 自然ふしぎ

形は丸っこいく、色は茶色から黒。ころんと転がればいもむしの糞とまちえそ  
うだ。実は、ボルボノータというツノゼ  
ミの仲間（体長3〜4mm）である。  
だから、葉の上に糞のようなものが落  
ちている時は油断は禁物。間近でジューッ  
と睨めっこ、「坊さんが屁をこいた」ま  
たは「だるまさんが転んだ」と歩くのを



7

確認するか、飛ぶのを待つか。それで勝  
負がつかなければ、指でつつく。さっと  
ジャンプし、プーメランのように近くの  
葉に着陸すれば、それは糞ではない。  
アップで見ると、ちゃんと眼あり脚あ  
り。翅もあって、意外にかわいい。環境  
保護教育の現場で、子供たちから大人ま  
でが軽快に飛ぶ糞を楽しんでいる光景を  
見ていると、私の方もいつか笑顔になっ  
ている。  
(西田賢司・探検昆虫学者)



## 自然ふしぎ

コスタリカの熱帯雨林から湿林にかけて、キク科の葉の裏などにシフォニア・クラバタというツノゼミがよくいる。体長5mmの体に、黒光りするフォークのようなツノがやけに目立つ。ただし、大きな眼が少し飛び出したツノゼミは警戒心が強い。近づくとシューとすばやくどこかに飛んでいって、撮影が難しい。



8

胴体は周囲によく溶け込む半透明のグリーン。翅の脈の濃い部分も含め、黒い部分だけを横から見ると、あごを広げたアリの威嚇のポーズに見える。交尾をしている時など、まるで触覚で触れ合っているかのような姿を演出する2匹のアリのようだ。アリの背負っているれば、アリから身を守る必要も、アリに身を守ってもらう必要もないことは確かだ。

(西田賢司・探検昆虫学者) 『おわり』

